

中村竹志社長・三木孝浩監督

~人とのつながりとチャレンジの重要性~

C 班：秋山・石原・久保

<はじめに>

私たちは「地球の歩き方 T&E」の中村竹志社長と、映画監督の三木孝浩監督にインタビューさせていただきました。お二方の二十歳のころを二パートに分けて発表していきたいと思います。

中村社長は、海外旅行に興味がある班員の秋山が旅行ガイドブック「地球の歩き方」が好きで、将来そういった企業に就職したいと考えているためお話を伺いたいと思いました。

三木監督は、ミュージックビデオに興味があった班員の久保が特によく見ていた作品の多くが三木監督の作品であったため、お話を伺いたいと思いました。

SIDE:A~中村竹志社長~

<プロフィール>

○中村竹志社長：1957 年生まれ、東京都出身、法政大学法学部卒。当時就職支援をメインに活動していたダイヤモンド・ビック社に就職。6 年前、ダイヤモンド・ビック社の子会社である地球の歩き方 T&E 社長に就任。

・地球の歩き方 T&E：1999 年 9 月 14 日設立。新宿に本社を構え、旅行ガイドブック「地球の歩き方」に関する Web サービス事業や留学、旅行の代理、グッズ販売などを行っている。

<インタビュー内容>

○中村社長の二十歳のころ(学生時代)

中村社長は学生時代、主にサッカーとバイトに力を入れていらっしゃったそうです。

サッカーは幼少のころから続けており、大学在学中はサッカーサークルには所属せずクラブチームでプレーされていたとのこと。クラブのジュニアチームのコーチも受け持っていたようで、そこで教えることの楽しさを感じ、先生になることも考えていらっしゃったようです。

バイトはとにかくいろんなことに挑戦しようと思い、様々な職種を経験されました。

喫茶店や飲食業、工事現場から果ては北海道の牧場でも働かれたとのこと。一時期

は紳士服売り場でもバイトされていたそうで、そこで接客時のマナーを学ばれ、そのことは就職後に営業で大いに役立ったそうです。

学業面では、3年次からのゼミ活動に積極的に取り組みました。教育法を研究テーマに、自分から行動すること、学ぶことを身につけられたそうです。

学業よりも、自分の好きなことに集中すること、そしてバイトを通して**様々な場所へ行きたくさんのことを学ぶことを大事にした学生時代**だったそうです。

○なぜ今の業界に進もうと決めたか

中村社長は学生時代、具体的にこの仕事に就きたいというビジョンは持っていなかったそうですが、なんとなく頭の隅で「先生」か「世界を回るような仕事」がいいなと思っていらっしまったようです。ダイヤモンド・ビック社に応募しようと決めたのは、机の上に置いてあったダイヤモンド・ビック社の応募はがきが偶然目に留まったから、という何気ないことがきっかけだったそうです。

○私たちへのアドバイス

中村社長が私たちに特におっしゃったのは、**とにかくいろんな場所へ自分から飛び込んでいき、さまざまな経験をし、たくさんの人と接することが大事だ**ということです。中村社長自身も学生時代のアルバイトであらゆることを学んだとのこと。サッカーのクラブチームや学生時代の恩師の方や同級生、先輩後輩とも今でもよく会っていらっしまうようで、**人とのつながり**を大切にしている様子がよく伝わります。

また、情報化社会の中で表面的な情報に流されないことも重要だとおっしゃっていました。ネットひとつでありとあらゆる情報を手に入れられる社会ではありますが、**自分の足で人から直接情報を得ることも大切だ**とのこと。そうすることで行動力や、情報の真偽を見極める力が養われるとおっしゃっていました。

SIDE:B~三木孝浩監督~

<プロフィール>

○三木孝浩監督：1974 年生まれ、徳島県出身、早稲田大学第一文学部卒。1998 年にソニーミュージックに入社、数々のミュージックビデオを手掛ける。2006 年に独立し、2010 年に長編初監督作品となる映画「ソラニン」が大ヒット。その後も「僕等がいた」や「陽だまりの彼女」などの作品も手掛けている。

<インタビュー内容>

○三木監督の二十歳のころ(学生時代)

三木監督は学生時代、主にサークルに力を入れていらっしゃったそうです。

元々中高のころから映像関係の仕事に就きたいという思いがあったが、どうすればその職に就けるかなどはわからず漠然としていたそうです。中高からの流れでサークルは映像関係のサークルと演劇サークルに所属されていました。

第一文学部を選ばれたきっかけも、第一文学部が映像関係の学問を学べる場所であったからだそうです。

三木監督曰く、学業はほどほどにとにかくサークルに打ち込まれたとのこと。バイトはつばめグリルという洋食屋さんで長く働いていらっしゃったそうです。

○なぜ今の業界に進もうと決めたか

先ほどの項目でも説明しましたが、三木監督は中高のころから映像関係の仕事に興味がありました。サークルで映像制作に熱中するうちにその思いはさらに強くなり、二十歳のころには仕事として映画を製作したいと考えていらっしゃったそうです。大学三年のころには大学を休学し、1 年間映像の専門学校にも通われました。

そして映像関係の企業について調べていくうちに、ミュージックビデオの制作にも関心を持ち最終的にソニーミュージックの映像部門に就職されました。そこでオレンジレンジや YUI、アジアンカンフージェネレーションなど数々の有名アーティストのミュージックビデオを手掛けられました。

しかし心の奥ではまだ映画を製作したいという思いがあり、ついには独立を決意されました。そしてその知らせを聞いた知人の映画プロデューサーの方が三木監督に

「映画を撮ってみたいか」とオファーをされ、それが映画監督としての道の第一歩だったそうです。

○私たちへのアドバイス

三木監督が私たちに特におっしゃったのは、**考えているだけでは何も始まらないのでまず行動に移してみる**ということでした。自分がやったことは絶対マイナスにはならず、途中で違うなと思ったらやめればいいし**そこで得たものはいつか必ず別の時に役立つときがくる**とのことでした。

また、中村社長と同様に、**人とのつながり**が大切だともおっしゃっていました。三木監督が独立した時に映画プロデューサーの方が声をかけてくれたように、**誰がいつチャンスを与えてくれるかわからないのでなるべくたくさんの人とのつながりを持つべきだ**とのことでした。

そして私たちが最も感銘を受けたのは、映画「ソラニン」の劇中でも登場した「**他人に評価されて初めて価値がでる**」というお言葉です。三木監督自身も自分の作品が外に出たときどう評価されるかが不安だったそうですが、その言葉を受けてそのままだったら何も変わらないし、せっかく自分が作ったものが人目に触れず終わるのはもったいないなと思いに**なり自信を持って仕事に取り組もうと決意された**そうです。

<まとめ>

まず中村社長のインタビューでは、中村社長自身がアルバイトなどを通してそうしたように、自分からいろんな場所に飛び込んでいき経験を積むことが今後の人生につながるのだなと思いました。そこで得た経験がいつか絶対役に立つ、あらゆることは必ずどこかでつながっているともおっしゃられていました。

三木監督のインタビューでは、考えることも大事だが、自分が気になったことに対してすぐにアクションを起こすことでより人生の選択肢を広げることができるということを学びました。中村社長もおっしゃられたように、三木監督も、「自分がやったことは絶対にマイナスにはならないから何か他のことをやるときに役に立つときがくる、だから学生時代のうちにいろんなことに挑戦するべき」とおっしゃられていました。

もうひとつ、今回お二方のお話を伺って私たちが感じたことは、人とのつながりの重要性です。お二方とも特に強調していらっしゃったのは**様々な人とのかかわりを持つべきだ**ということでした。

このように全く違う道に進まれたお二人でも、特に重要だと思ってらっしゃることは非常に近いことでした。まとめると「自分から進んでアクションを起こし、いろんな経験を通して様々な人と出会うこと」が、二十歳のころに必要なことだと思いました。

そして「二十歳のころ」を通してチームで動くことの難しさ、そしてそれを乗り越えた時の達成感を味わうことができました。4月からは本格的にゼミがスタートするので、その場で今回得たものを活かしていきたいです。